

るまい。米哥條約の締結された當時の精神からいふと、外國の勢力によつて侵略された場合、アメリカはコロムビアの保全を扶ける目的から右の條項を挿入したのであるが、コロムビアに内亂が勃發した際においても、アメリカは矢張地峽附近の中立を確保する必要があるといふのでは、まるで條約締結の根本精神に反するではないか。ドヴァール將軍が生擒された後、怒髮天を衝いたトールレス大佐が、パナマ鐵道會社に對して兵員の輸送を要請するや、アメリカの資本によつて成立した同會社は、終始言を左右に托して應じなかつたが、これまたアメリカ政府の窺に劃策したところだ。一九一三年、南米訪問の旅に上つたルーズヴェルトが、智利の首府サンチャゴ市において一場の講演を試み、口を極めてパン・アメリカニズムの効能を吹聴するや、聽衆中にあつた智利大學の學生等は、頻に「コロムビア」の語を連呼して彼の講演を妨礙したといはれてゐるが、コロムビアに對する彼の遣口を見ると、それも強ち非禮だとして咎めるわけにはゆかない。

願ると、奉直戰爭以來、滿洲の平野を脅した數度の戰亂において、日本政府の執つた態度は、しばしばアメリカの御機嫌を傷うたが、以前のパナマに對して有するアメリカの立場と、現在の滿洲に對して有する日本の立場とは、到底日を同じうして語ることは出来ない。日本は、いまだ會て條約文を故意に曲解し、理屈のないところへ理屈を付けて、白々しい三百的口吻などを弄したことはないはずだ。當然の權利を擁護するために、當然の行動を執ることさへ惡事の中に這入るとすれば、無形の權利を主張するために、無法な手段に訴へるのは、全體何の中に這入るのか。アメリカの近代史を精くと、力即正義の理想を高調するマキアベリズムの苛辣な手法は、正義の國、人道の國として知られたアメリカにおいて、最も典型的な發達を遂げてゐるのだ。疑ふものは、須らく退いてスコット・ニアリング教授の「アメリカ帝國」を讀め。彼は彼獨特の鋭利なる筆致をもつて、この巨然たる怪物の怖るべき本性について語つてくれるだらう。われわれは、最早ワシントンや、リンカーンの理想主義を信ずる必要はない。信ずる必要のあるものは、アメリカの帝國主義や、アメリカの侵略主義だ。

## 五 米西戦争と比律賓

ここに於いて米西戦争の経過を回顧して見るのも、偽善者アメリカの正體を見究めるために、多少の参考にはなるかも知れない。

米西戦争勃發の動機として傳へられるものは、いはゆるアメリカの戦艦メーン號の爆發事件だ。當時、壓制者スペインの手からキューバを救ふべしと呼號してゐたアメリカは、この爆發事件の原因をもつて、全然スペインの陰謀によるものだと言ひ、一も二もなくスペインに向つて喧嘩を吹きかけたのだ。戦争は一年足らずも續いたが、老國スペインが如何に奮闘しようと、到底新銳のアメリカに敵するわけはない。一八九九年二月六日、米西兩國の間には講和條約が成立し、その條約の結果、スペインは、キューバ、ポルト・リコ、グアム及び比律賓をアメリカに對して割き、その代償として、四千萬圓の金を受取つた。事件の経過は、

上述のごとく極めて簡單であるが、スペインに對して執つたアメリカの手口を見ると、そこにもまたアメリカ一流の惡辣さが潜んでゐるのだ。

アメリカの戦艦メーン號の爆發は、當時にあつても、一個の不可解な謎であつた。アメリカ側の調査委員と稱する輩は、頭からスペインの陰謀に相違ないと主張して、種々の曖昧な證據を並べたてたのであるが、公平な第三者の眼から見ると、それらの證據は、一として事件の真相を語る資格のあるものではなかつた。然るに、戦争の開始を熱望してゐたアメリカ側は、スペイン側の道理ある主張には耳を傾けず、一八九八年四月二十日、アメリカの議會はスペインに對する宣戰を布告し、その優勢な艦隊を送つて、サンチャゴにおけるスペイン艦隊を攻撃せしめたのだ。スペイン側からいふと、これほど莫迦けた災難はあるまい。責任の所在を決定すべき充分な調査もせず、頭からスペイン側に罪あるものと決めてかかつた上、自分の何等豫期しない戦争を仕掛けられたのだ。戦争のための戦争といふ言葉があるが、米西戦争におけるアメリカの遣口は、古代の征服者といへども、尙ほ潔しとしない暴漢同

然の態度を學んだものではないか。假にメーン號の爆發がスペインの陰謀に原因することが判明したにしても、それ自身が直ちに米西兩國を最後の戦争に導くべきものとは限るまい。スペインにして誠實な謝意を表し、正當な損害を賠償するならば、それをもつて戦争の暗雲は一掃されるわけだ。否でも應でも戦争をしなければ承知しないといふのは、物の道理を辨へない無頼漢の仕草ではないか。況んや、スペイン側に果して責任を負ふべき理由があるかどうかは、まだ神様以外の何人にも判つてゐない事實であるにおいておやだ。

メーン號の爆發事件は、スペイン領キューバのハヅアナ港において起つたことだ。して見ると、われわれは、自衛上アメリカの軍艦を自國の港灣に招待することも出来ないわけではないか。アメリカ兵の過失から起つたアクシデントでも、アメリカの虫のゐるところ次第では、いつ何時難題を吹きかけられ、いつ何時戦争に曳摺りこまれる危険があるが判らないからだ。最近の研究に據ると、メーン號の爆發は、どうも火藥の自然爆發に起因するらしいといふことだが、果してさうだとすれば、いよくもつて浮ばれないのはスペインだ。今更爆

發の原因が判つたところで、スペインは最早アメリカに對して原狀恢復を要求する勇氣もあるまいし、アメリカの方でも、スペインの原狀回復の要求を受付ける特志もあるまい。要するに、スペイン側の負ふべき最大の過失は、彼が餘りに弱かつたといふことだ。アメリカの艦火の前に立つて、何等屈するところがないほど強大でさへあれば、彼にとつて呪ふべき戦争も起らなかつただらうし、假令戦争が起つたにしても、彼はをめぐり比律賓やポートルコを取られずに済んだはずだ。國家として存立する以上、弱國であるといふことは、それ自身一つの惡徳であると觀念する外はない。

米西戦争に際して、アメリカが執つた比律賓に對する態度も、明かな國際的欺偽だ。一八九八年三月、デユウエーの率ひるアメリカの艦隊が、軍港カヱイテの奥深く潜んでゐるスペインの艦隊を撃破するや、アメリカは、當時の比律賓獨立軍の首領エミリオ・アギナルドに對し、彼にして若しスペイン軍に對抗してアメリカを扶けるならば、平和恢復の曉において、アメリカは、快く比律賓の獨立を承認すべしといつたのだ。アメリカのいふところを眞

に受けたアギナルドは、勇躍してスペイン軍との交戦を続け、とりあへず假政府を樹立して比律賓の獨立を宣言したが、同年八月、アメリカの陸軍が、海を渡つて比律賓に到着するや、アメリカは、ただちに殖民政府を設けて、明かにアギナルドに對する誓約を破棄するの態度を執つた。事の意外に驚いた比律賓軍は、アメリカの背信を怒つて蹶起したが、もとよりアメリカに敵するわけがない。戦争は埒もなく片付き、一八九九年以來、比律賓群島の全土には、翔翾たる星條旗がひるがへることになつたのだ。

アメリカ人の理想とする正義人道の立場からいふと、米西戦争そのものが、すでに無名の師であるといつていい。アメリカは、自家の領土慾を満足せしめるために、強いてスペインを戦争に誘うたのだ。侵略主義といへば、これほど露骨な侵略主義が何處にあらう。殊に、比律賓領有の野心を満足せしめるために、憚れむべき獨立軍を欺瞞して憚らないに至つては、殆んど評すべき言葉がない。正義が何處にあるか。人道が何處にあるか。彼等は、動もすると國祖ワシントンの遺訓を口にしながら、彼等の國祖ワシントンは、彼等のイゴイズムを

發揮するためには、如何なる正義の觀念をも踏みちつて差支へないと教へたか。暴虐比なしと評されるロマノフ時代の外交においてさへ、かかる國際的な不正は、極めて稀な場合にしか起つてはるまい。アメリカの圖々しい歴史家は、米西戦争を指してさへ、尙ほ正義と自由との戦争だと記載してゐるが、米西戦争にして尙ほ正義と自由との戦争だとすれば、そもそも如何なる戦争が正義と自由とに反した戦争であるか。厚顔も、ここに至ると、一種の御愛嬌だといはなければならぬ。

## 六 布哇の領有

一八九九年、恰も米西間の風雲が急を告げんとするころ、長い間の懸案であつた布哇の合併が宣言され、爾後太平洋の孤島たるカナカ族の郷土は、完全にアメリカの主権の下に屈服するテリトリーとなつた。この事件に對して緊密な利害を感じた日本は、ひとり立つてアメ

リカの不法を抗議したが、もとより彼の耳を聳すところではなかつた。

布哇の領有においても、アメリカは矢張同様な詭計を弄してゐる。一八九三年、ホノル、市に革命運動が起つたが、それは布哇王國の憲法問題を解決する目的を有するものだとして稱してゐた。當時布哇に對して最も大きな投資をしてゐたものはアメリカであつたが、這般の消息に通じるものは、革命運動の背後に潜むものが、とりもなほさず、アメリカの資本家であることを信じないものはなかつた。革命運動が勃發するや、アメリカ政府は好機乘すべしとして軍艦ボストン號をホノル、市に派遣し、同號から上陸した陸戦隊は、布哇政府の強硬な抗議があるにも拘らず、革命派の保安委員會を保護して、布哇に於ける君主制の廢止と、布哇とアメリカとの合邦が成立するまでの假政府の建設とを宣言せしめた。實際上、事のすべてを計畫したものはホノル、駐在の米國公使スチープンスであつたが、傍若無人な彼は、前記の宣言が漸く發布されたばかりで、布哇の女王は未だ儼然たる君主としての權能を有つてゐるのに、直ちに假政府を承認するといふ暴舉を敢てした。かうなつて來ると、國際法も何

もあつたものではない。一にも腕力、二にも腕力、——ハイチやパナマにおいて無類の効能を發揮した腕力は、如何なる場合にあつても、常にアメリカ人の愛好するところだ。

ホンの口先きだけでも、常に正義人道を呼號してゐるアメリカのことだ。如何に侵略好きな彼等でも、スチープンスの遣口は餘りに酷いと思つたものか、布哇合併案は、大統領ハリソンから大統領マツキンレーに至るまで、殆んど數個年の長きに亙つてアメリカ上院の阻むところとなつてゐたが、僞善は、結局僞善だ。スペインとの戰爭熱が煽り立てられるや、一氣に上下兩院を通過して終つた。かくて太平洋の小王國布哇は滅亡し、慄れむべき女王リリユオカラニは、一九一七年まで生き永らへてゐたが、同年九月十一日、病をえて死んだ。悲惨といへば悲惨、運命といへば運命だが、何れは行き當るべき悲劇に、意外に早く行き當つたといふだけのことだ。太平洋の孤島とはいひながら、それらの島々が占めてゐる地位を見るがいい。カリビアン海における掌大の島嶼に對してすら垂涎措く能はざるアメリカが、太平洋の中心ともいふべき絶好地點を、到底そのままに見逸して置くわけがない。吞氣

ものカナカ人等は、今も尙ほクワイ・ナツツを燃やし、カバを着け、花を飾つて踊り狂つてゐるが、彼等が會つて漁獵をこととした眞珠灣には、今や巨砲天を指し、艦艇をならべ、一令の下に西に向つて進撃せんとする航空機が翔んでゐるのだ。布哇王國滅亡の悲史は、よろしくシエークスピアの脚色に委ねたらいいが、日本帝國興亡の鍵は、果して何人の手に委ねたらいいか。問題の性質は、決して輕視さるべきものではあるまい。

英國の膨張を論ずるアメリカの史家は、しばしばイギリスの冒險家をもつて殘忍そのものだと批難する。彼等は印度を論じ、南阿を論じ、支那を論じ、——かくて決論を下して曰く、英國のなすところは常に弱いものいぢめで、その侵略的行爲は概ね宥すべからざる欺瞞の上に立つてゐると。私は、一々アメリカの史家に贅意を表するものだ。英國が、今日の大英帝國になるまでには、多くの罪惡に汚された歴史が山積してゐる。良心ある英人であつたならば、恐らくは顔を緘らめずに自國の膨張史を讀過することは出来まい。アメリカの史家が指摘するところは、たしかに英人の急所を衝いてゐるといつていい。しかし、私にとつて解す

べからざることは、英人に對して左程までに批評の峻嚴を示してゐる彼等が、何故彼等の祖國たるアメリカに對しては寛大なのか。アメリカ人の手になつたアメリカ史といふアメリカ史を見るがいい。正義とか、自由とか、人道とか、光榮とかいふ言葉は、隨時隨所に散見して、殆んど應接に遑ないほどであるが、彼等が英人の頭に冠らせたごとき不祥な文字は、如何なる頁を探しても、到底見出すことが出来ないだらう。果して然らば、彼等はアメリカの膨張史をもつて、玲瓏珠のごときものだと見てゐるのであらうか。

パナマの獨立にしても、比律賓の領有にしても、布哇の滅亡にしても、アメリカのなしたところは、何れも皆弱きものいぢめであり、何れも皆宥すべからざる欺瞞の上に立つてゐるものだ。赤子の腕をねぢるぐらゐるものではない。死にかけてゐる病人でも蹴飛ばすのだ。それも表面から堂々と名乗つてやる惡黨の仕事であれば、まだ何處にか取柄もあるといふものだが、自分はこつそり陰にかくれてゐて、他人の手で酷い仕事をやつてのけるのだ。惡黨には、惡黨の道徳があるはずだ。アメリカ流の遣口は、金箔付の惡黨といへども、尙ほ卑怯

として斥けることであるに相違ない。米國公使スチーヴンスの末路が如何なるものであつたかは知らないが、アメリカの歴史家等が攻撃する英國には、尙ほ印度の征服者クライヴをして蕭條たる晩年を送るの止むをえざらしめるだけの制裁はあつた。若し、卑劣漢スチーヴンスがしやあくとして愉快な一生を送つたとすれば、ビルグリム・フアーザーズの國、ワシントン、リンカーンの國として、彼等が事々に自讃するアメリカといふ國は、道義的發達の程度において、英國よりも杳かに下位にある國家だと斷言しても差支へあるまい。

## 七 メキシコ政策其他

以上の叙述をもつて、偽善者アメリカの惡辣な侵略的事實が盡きたわけではない。筆誅酷薄にすぎるとの嫌ひはあるが、現代はアメリカ讚美者をもつて充たされてゐる時代だ。世間の迷妄を打破するためにも、私が今一段の論陣を張ることは、必ずしも無用なことではあるまい。

一八四六年、アメリカはメキシコと戦つて勝ち、グアダルペ・イタルコ條約の結果として、テキサスと、ニュー・メキシコと、アツバー・カリホルニアとをえた。これはアメリカが武力を用ひて侵略主義を執つた最初ともいふべきものであるが、この戦ひにおいても、アメリカは強ひてメキシコに戦争を仕掛け、メキシコをして止むなく干戈を執つて立たしめたのだ。それ以來アメリカが、如何に辛辣な魔手を揮つてメキシコを掻きまはしてゐるか。革命また革命、周年殆んど寧日なしといはれるメキシコの内亂騒ぎを見ると、如何に自分の懐が大切であるとはいへ、多少は無辜な人民の迷惑をも思ひやつてやるのが人情といふものだ。しかし、黄金のために眼の昏んでゐるアメリカ人には、生憎さうした菩提心の持ちあはせはないらしい。アメリカに對するメキシコ人の深怨骨に徹し、アメリカを呼ぶに「北方傳來の仇」といふ激語をもつてするのも、決して無理からぬことだ。一八五三年、ガツゼン條約によつて、アメリカはニュー・メキシコに接壤する宏大な領土の買収に成功したが、これとても

メキシコの欲するところではなかつた。大統領タフトは、比較的メキシコに對する壓迫の手を緩めたが、正義人道屋のウィルソンは、反つて兵をヴェラ・クルーズに派して、メキシコの上に干涉の強壓を加へたことがあつた。いづれにしても、メキシコの油田に投ぜられたアメリカの資本二十億圓が存在するかぎりには、メキシコ國民も落付いた平和を享樂する時はあるまい。

アメリカの得意とするところは、例の砲艦政策(Gun-Boat Policy)である。何がといへば、すぐ軍艦を送つて脅迫するのだ。勇敢なルーズヴェルトは、日本に對してさへ軍艦を向けて脅迫したぐらゐであるから、彼が中米や南米の諸小國に向けて軍艦を送るのは、ホンの日常茶飯事であるかも知れない。一九〇六年、彼がグアテマラ外二國間の紛争に干涉してから以來といふものは、殆んど毎年といつてもいいほど干涉の手を伸したのだ。一九〇九年にはニカラガの財政に干涉し、一九二二年には同國の革命鎮壓のためと稱して軍艦を送り、一九一五年にはハイチに軍艦を送り、一九一六年にはサン・ドミンゴを保護國とし、カリビア

海の諸小國は、今や一國として完全な主權を有するものはなくなつた。一九二四年、ガテマラ、ホンヂユラス、サルバドル、コスタリカ、ニカラガの五國が相圖つて一共和聯邦國を組織することにしたが、かかる機運を速成した原因も、矢張強國アメリカの壓迫に基くのだ。

私は茲で當然アメリカの極東政策について一言すべきだらう。一八九九年、國務卿ヘーが、所謂『極東の門戸開放』(The Open-Door Policy of The Far East)を主張してから、昭和五年の今日に至るまでには、すでに三十年に近い歳月が流れてゐる。日露戦争後におけるハリマンの妄想的帝國が雲散霧消したのをキツカケに、爾後の日米兩國間には、國務卿ノックスの持出した滿洲鐵道中立の提議を初めとして、殆んど數へ切れないほどの難問題が續出した。日本もよく堪へ忍んだが、無類の我儘者であるアメリカにしても、よく堪へ忍んだものだと褒めてやらなければなるまい。アメリカ側には、日本の妨害によつて、自國の企てることが一として成功しないのを癪に障へ、悶々の極終に狂死した人間もあるくらゐだ。外の



場合であると、彼は即座に例の砲艦政策を持ち出すのであるが、それも相手が日本であつては都合が悪い。問題が押詰つて来ると、止むなく溢々と引返すのだ。彼にいはせると、日本はアメリカの極東進出を阻む不埒者だといふぐらゐの理窟はあるだらうが、日本にとつては、またとかけがへのない極東のことだ。さう易々とアメリカに不法な横車を押させるわけにはゆくまい。自國の抱擁する膨大な領土にも飽き足らず、中米に手を出し、南米に手を出し、尙ほ足るを知らずして、太平洋の五千海里を隔てた極東にまで手を伸さうとするに至つては、ホト／＼呆れ果てて物が言へない。アメリカが何といはうと、正邪善惡の何れにあるかは、神が既に照覽ましましてゐることだ。日本が、一步を譲つて屈するわけではない。日本にして屈しなければ、彼もまた屈することはあるまい。極東の天地は、依然として暗雲に覆されてゐる外はないのだ。

倫敦の聖ゼームス宮においては、今や軍縮會議が開かれてゐる。僞善者アメリカは、種々の僞辯好辭をもつて日本に六割の比率を押付けようと努めてゐるが、その腹の底には、どんな

化物が潜んでゐるか判つたものではない。豫め敵の武器を叩き落して置いて、「サア来い。」と聞き直るぐらゐは、在來のお手並から見ても、十分に豫想出来ることだ。關東の大震災が起つて、日本が曠古の大災厄に遭遇してゐる時、好機至れりとして、喧嘩の間に移民禁止案を通過させたのは、果してどの國であつたか。アメリカを評して、人は屢々壯快な國だといふ。しかし、壯快な國には、他國の災厄に乗じて仕事をするやうなサモシイ行動は出来ないはずだ。

「恥も、外聞もない。」といふのは、目的を達するために突進するアメリカの卑劣な態度をいつたものだ。われわれは、斷じて昂奮する必要はない。黙つて、冷静に、僞善者アメリカのなすところを見てもらへばいい。若し、アメリカにして常規を逸する行動に出るやうであれば、それこそ極東尙武の民が天に代つて彼の頭上に鉗槌を見舞ふべき時だ。

## 八 モンロー主義の正體

最後において、私は今一言して置きたい。

アメリカが、他國に對して何か言ひがかりをつけようとする時には、必ずしもモンロー主義 (Monroe Doctrine) といふ言葉を持ち出すのだ。モンロー主義とは、全體何であるか。われわれは、一應モンロー主義の正體を見届けて置く必要がある。

一八二三年、アメリカ第五代の大統領ゼームス・モンローが、初めて一篇のメッセージを議會に送り、かの名高い三個條の宣言をなした當時にあつては、いはゆるモンロー主義の本質は、「アメリカもヨーロッパのことには、既を容れないから、ヨーロッパもアメリカのことには、既を容れて呉れるな。」といふほどの意味であつた。當時の状態からいふと、アメリカにおける殖民地が續々と獨立するので弱り切つてゐたスペインは、扶けを神聖同盟の諸強國

に對して求めさうな形勢があつたので、この形勢を看取して驚いた大統領モンローは、自ら先んじてモンロー主義を宣言し、豫め神聖同盟の干渉を封じたのだ。この宣言が極めて機宜に適した處置であつたことは、史家の等しく承認するところで、十九世紀におけるアメリカの素張らしい發達は、全く此宣言に負ふものだといふ論者さへあるくらゐだ。今日のアメリカ人等が、ワシントンの遺訓と、獨立宣言と、外にモンロー大統領の宣言とを加へて、この三つのものを金科玉條のごとくに心得てゐるのも、大いに理由のあることだといはねばならない。

しかし、現代のアメリカ人等が使用するモンロー主義の意味は、モンロー自身の與へた言葉の原義とは大いに異つてゐる。「アメリカ以外のものは、アメリカに容喙するな。」——この一點だけは依然として維持されてゐるが、「アメリカは、アメリカ以外に容喙しない。」といふ一點は、いつの間にか影も形もなくなつてゐる。歐洲大戰以後のアメリカは、ヨーロッパに對しても大いに容喙するし、亞細亞に對しては無論のことだ。國際聯盟を蹴飛ばすために

は、御手のもののモンロー主義を擔ぎ出すが、自分のために必要な時には、どこへでも無遠慮にノサバリ出して来る。自分のいひ出したことには、一も二もなく聽従することを強ひるが、他人のいひ出したことには、それぞれ難辭を付けて同意しようとしなない。歐洲大戦後のヨーロッパが、アメリカのためにどれだけ手を焼いたかといふことは、ここに悉しい例證を擧げるまでもあるまい。

「アメリカは、ヨーロッパをなぐさみものにしてゐるのか。生かもしない、殺しもしない。それでゐて親切らしい素振をするのだ。アメリカは、全體吸血鬼か！」

氣短かな一徹者のクレマンソーが、青筋を立てて怒號したのも無理はない。ヨーロッパの破綻に瀕した財政が問題になつた時でも、ヨーロッパが、幾度か七重の膝を八重に折つて哀訴嘆願するまでは、容易に救済の手を伸べようとしなかつた。ヨーロッパに容喙する以上は、徹底的に容喙するがいい。それでこそ、モンロー主義の改竄にも、多少の道德的意義が加味されようといふものだ。何かといふとアメリカは、直ぐ「自分の決めた方法」(the way to

be determined by us)といふことを主張する。他人の意志に頓着せず、自分の氣に入つた方法で遣るといふ意味だ。モンロー主義の解釋には種々雑多な流儀があるらしい。

現代におけるモンロー主義には、今一つの態様がある。アメリカが、カリビアン海の諸國や、中央アメリカの諸小國に干渉する時は、いつもモンロー主義を根據とする場合が多い。

アメリカ以外のものは、アメリカに口を出してはならないが、アメリカは、南北アメリカの何れに對して口を出しても差支へないといふのであるらしい。口を出すぐらゐるはいいが、併合しても勝手だといふのでなければ、アメリカは、モンロー主義の名によつて、在來のごとき侵略的な行動は執らないはずだ。ラテン・アメリカの諸國が、アメリカの主張する汎米主義 (Pan-Americanism) をもつて、アメリカ流の帝國主義の一變形に過ぎないと解釋してゐるごとき、今日のモンロー主義は、アメリカ流の侵略主義の一變形に過ぎないと解釋してゐるごとき、何れにしても、アメリカ人の頭は調法に出來てゐる。彼等は、今にアメリカの獨立宣言の趣旨を徹底させるといふ名目の下に、全世界は須らくアメリカの統治に服すべし

と呼號し初めるかも知れない。

アメリカニズムが、世界の文明を脅威するごとく、アメリカの侵略主義は、世界の民族的獨立を脅威してゐる。——強國アメリカの存在は、全人類にとつての一大災禍であるといつ

ていふ。

## 世界に漲る反アメリカの思潮

## 一 ドイツの興へた教訓

歐洲大戰前における新興ドイツの威力は、もつて全世界を號令するに足りた。當時におけるカイゼルの一顰一笑が、如何に全世界の注意を刺戟したかは、今に向ほ人の記憶に新たなところだらう。ウイルヘルム大帝の盛時、執政ビスマルクの威權赫々たりし時代においても、ドイツはいまだカイゼルの時代におけるがごとき權勢の最高峰に立ちえたことはあるまい。

當時のカイゼルは、自家の帝國主義的野心を修飾するために、辭を舊約聖書の中にもとめて、しばしば「光輝ある甲冑」といふ言葉をもちひた。自家の行藏を神秘の霧に包んで、出るだけ道德的意義を加味し、彼の野心に對する批難者等の眼を瞞まさんとしたのだ。好戦詩人リサウエルが「憎惡の歌」を作つて、「神よ、英國を罰せよ。」と歌つたところを、カイゼ

ルは約言して「光輝ある甲冑」といひかへたまでのことだ。——當時におけるカイゼルのレトリックは、當時におけるドイツ國民のレトリックであつたと思へばいい。

一八九二年のグラッドストーン内閣以來、英國外務省にあつてダウニング街の樞機を握つてゐたエドワード・グレーは、かつてカイゼルの言葉を評していつたことがある。

「カイゼルは、しばしば光輝ある甲冑といふがごとき不穩な言葉を用ひたが、それは必ずしも劍を抜く意ではなかつただらう。しかし、この不穩な言葉を耳にするものは、勢ひ自家の存立について不安の念を擁かないわけにゆかなかつた。」

露骨にいふと「光輝ある甲冑」の前に跪いて、一も二もなく彼の逆鱗に觸れざらんことを努めたのは、當時における全世界の實狀であつたといつても過言ではあるまい。カイゼルの一喝に逢ふと、傲岸不屈の痛快兒であつたデルカッセさへ、やむなくフランスの外務省から去らねばならなかつた。ロマノフ王家における最後の悲劇が、序曲として、カイゼルの惡魔的なモノローグをもつて初まるといつたところで、別に史家の異論を招く虞れはあるま

い。カイゼルの壓迫によつて戦争に追め込められ、カイゼルの陰謀によつて没落に導かれた意志薄弱な主人公の陥つた運命を観ると、私は巧みに仕組まれたシエークスピア式な悲劇を、まざまざと眼の前に見るやうな實感を與へられるのだ。

新興ドイツの勢威ならびなき時代、全世界がドイツの脚下に跪いてゐたことは、何等の疑ひをも容れない事實だつた。カイゼルの眼には、ボツダムの宮廷に參候する外國の使臣等是一種の朝貢者と見え、ドイツ人の眼には、ドイツのクルツルを祖述する異邦の學者等は一種の禮拜者と映り、ドイツ帝國は、榮譽の座に倚つて全世界に光明を振り撒くものごとき矜りを感じてゐたに相違ない。強者の周圍を取りまく阿諛と佞辯とが、心願つて冷かに自己を顧みるの暇なきものをして、しばしば自己に對する至純な好意の表現であるかのごとく感取されることは、その實例において乏しくない。——歐洲大戰前におけるドイツは、明かに自己陶醉の危機に立つてゐたものといつていい。

歐洲大戰は初まつた。ドイツ首腦部の打算によると、英國は中立を保ち、伊太利は彼等の

側に立ち、ベルジウムは無抵抗をもつて終始し、日本は英國の例に倣ふに相違ないから、ドイツの大陸軍は、約二週日をもつて佛都パリを攻陥し、師を返へして露軍を撃破するに要する日子は、多くて一個月を出る虞れはあるまいといふにあつた。しかし、事實によつて證明された戦局の結果は、果してドイツ首腦部の打算したごとくであつたらうか。一枚の最後通牒を前にして、眞蒼に縮みあがるであらうと見縊つてゐたベルジウムは、意外にも渾身の勇を揮つて立ちあがり、築城術の天才ブリアルモン大將が一生の心血を注いだ五角堡や三角堡は、リエージュの要塞において、ドイツ攻城軍の巨大な砲煩に對して愕くべき威力を發揮したばかりでない。英國も、日本も、伊太利も、皆筒先きを揃へてドイツに對抗し、最後に至つては、歐洲の利害に對して何等の關心をも有たないと稱するアメリカさへ、ドイツに敵對するものとして顯れたのだ。「事豫期に反す。」といふ言葉はあるが、歐洲大戦の場合におけるドイツほど、この言葉の有する眞實性を痛感したものはあるまい。

運命によつて過度に恵まれたものが、運命に對して甘へすぎるのは、人情の自然として止むをえまい。運命によつて過度に恵まれた戦前のドイツ人が、運命に對して甘へすぎた結果が、戦後のドイツにおける悲劇を將來したのだとすれば、如何に現在の悲境を怨訴するドイツ人といへども、尙神の攝理として諦らむべき筋はあるだらう。ヴェルサイユ條約の結果、聯合國委員の嚴重な監視の下に、ドイツにおける總てのタンク、すべての飛行機、三萬五千の大砲、十六萬の機關銃、二百七十萬の小銃が木葉微塵に破壊されるのを見た時、かつて軍國ドイツの光榮を夢みたドイツの將軍等は、果して如何なる感懷を抱いたか。強者は、強者なるのゆゑをもつて、それ自身の裡に聽て敗者たるべき禍根を藏してゐるのだ。戦後のドイツにおける悲劇は、三十年戦争後のドイツにおける悲劇ほど大きい。しかし、今日のドイツにおける悲劇が示すところの教訓は、三十年戦争後におけるドイツが示したところの教訓よりも、さらに幾層倍か大きいものがあるといはなければなるまい。

## 二 戦前のドイツと現代のアメリカ

ドイツが身をもつて示した偉大な教訓を、現在において最も深く味ふべき地位に立つてゐるものは何處であるか。英國か、然らず。フランスか、然らず。日本か、然らず。イタリアか、然らず。——英、佛、日、伊、皆然らずとすれば、残るところは、たゞアメリカより外にはあるまい。

歐洲大戦以後のアメリカは、戦前のドイツにも増して、勢威赫々たる地位に立つてゐる。戦前のドイツに對しては、尙ほ大英帝國の牽制的威力が存在し、驕悍アメリカのごときも、尙ほドイツの壓迫に抗して立つだけの勇氣と實力とを有つてゐた。しかし、現在のアメリカに對しては、世界の如何なる國といへども、自家の權威を保持して、堂々と對抗し得るものはあるまい。國家としての權勢において、歴史の最高峰に立つた點からいふと、現在のアメ

リカは、古代のローマ帝國をも凌駕する地位にあるだらう。——覇者アメリカの名は、世界史の上に與へられた一つの「驚異」であるといつていい。

自國の超絶力を意識するとともに、最近の外交史上に顯著な存在を主張するアメリカの恣意が始まつた。ことのおこりは、アメリカの上院におけるヴェルサイユ條約の破棄に起源するのであるが、それから以後、アメリカの氣隨氣儘な外交振は、普ねく世界の通りものとなつた。自國の元首が主唱して出来上つた國際聯盟を一蹴して、世界の公約の前に恬然たるアメリカのことだ。サン・ゼルマン條約のごときは、もとより彼の一顧にだに値しなかつた。あるひはモンロー主義の名により、あるひは門戶開放主義の名により、それぞれの場合に過應する好都合な口實さへ見つかれば、ある時は英國に對し、ある時はフランスに對し、ある時は日本に對して鋒鏑を向け、自國の意欲するところは、他國の思惑如何に拘はらず、一として行はざるなく、一としてなさざるなきの横暴を擅ひまゝにするのだ。ウイヘルム大帝の威權盛んなりし頃、ヨーロッパはビスマークの激語の前に戦き、カイセルの勢威並びな



りし頃、世界はフオン・ビューローの豪語の前に畏縮するの観を呈したが、歐洲大戰後における世界が、アメリカの外交委員長ロッヂの片言隻語の前に如何に一喜一憂したかを回顧すると、私は座ろに戦前のドイツが有りし日の姿を想起しないわけにゆかない。

世界に君臨する覇者アメリカに對しては、さすがの英國さへ、ことごとくに一步を輸する状態だ。アメリカの恫喝に逢ふと、虎の子のやうにしてゐるメソポタミアの探油権をも割き、アメリカの意を迎へんがためには、英米海軍力の均勢をも忍ぶのだ。世界は今、覇者アメリカの前に拜跪して、彼に迎合し、彼を讚美し、彼と調子を合せ、苟くも彼の意に忤るがことき一切の言動は、極度の戒心をもつて忌避してゐるかのとき状態だ。アメリカ自身の立場から見ると、世界の總てはアメリカの追従者をもつて充たされ、現在のアメリカは、前代未聞の好意と歡聲との中に包まれて、全能者の光榮ある玉座に即いてゐるかのごとくにも感ぜられるだらう。しかし、過去のドイツを支配した攝理は、矢張現代のアメリカをも支配するに相違ない。強者は、強者なるのゆるをもつて、それ自身の裡に轉て敗者たるべき禍根を藏

してゐるものとすれば、歐洲大戰においてドイツの出會はした苦い經驗が、アメリカの未來においても待設けてゐないとはいはれまい。個人の幸福は、死後においてのみ清算されることを教へたソロンの遺訓に従へば、國民や國家の幸福も、非常時の後においてのみ清算されるわけだ。アメリカ及びアメリカ人の自己陶醉はいい。しかし、アメリカ及びアメリカ人の自己陶醉も、永久に現状のままで持續し得るものとはかぎらない。彼等は、彼等の自己陶醉から醒めて、今や最も深く自己を省みなければならぬ時ではあるまいか。

世界に漲る反アメリカの思潮を見よ。黙々として流れ、黙々として動いてゐる反アメリカの思潮を見よ。強者の暴壓に對する憤怒の情や、富者の専恣に對する反抗の念は、あらゆる世界の隅々まで瀰漫しつつあるではないか。露骨にいふと、アメリカに對して特種關係を有する三四の國家を除くと、世界の總てを擧げて反アメリカの感情を抱いてゐるといつても過言ではあるまい。アメリカに對して、特に求めるところのあるもの、アメリカに對して、特に恐怖の感を抱いてゐるもの、——それらのすべては表面上アメリカの追従者、若しくは

アメリカの友好たる態度を装うてゐるが、その本心を曝け出して見ると、一としてアメリカに對する反感を有たないものはあるまい。篡奪者は、多く君側の佞臣から出るものだ。アメリカに對して全幅の好意を捧げてゐるかのごとく振舞つてゐる國々の中においてさへ、アメリカの寢首を搔くものが絶無だらうとは保證出来ない。現在のアメリカは、幸ひにして順調な經路を辿つてゐるからいいが、何かのハズミで躓くことがあると、その時こそ、世界は皆マスクを脱いで反アメリカの本性を露すだらう。殊に、アメリカに對して怨恨を結んでゐるものや、アメリカのために酷い目に逢つたことのあるものは、復讐の好機至れりとして、眞先きにアメリカの咽喉笛を目蒐けて飛びつくかも知れない。——アメリカの富強は羨むべきものだ。しかし、アメリカの立つてゐる地位は羨むべきものではない。

### 三 メキシコの老紳士

ある英國の旅客が書いてゐる。

一九一九年、コロラドの大峽谷と並稱されるボラノス河の大峽谷を見物する目的で、米墨國境の互市場エル・バソ・デル・ノルテを出發して南行した彼は、彼の搭乗した汽車が、チワワ州の南部、シエラ・マドレの西麓、一望千里の大高原を駛走してゐる時、ある林間の一小驛から乗合したメキシコの田舎紳士を發見した。顔齡すでに七十歳にも近からんとする件の田舎紳士は、彼の愛子とも愛孫とも覺しき十歳ばかりの一少年を同行してゐたが、老後の思ひ出に首都メキシコ・シチーの見物に出かけるものと見え、彼の愛撫する少年を捉へて、切りにアナワク高原の大都が如何に壯麗であるかを説明してゐた。その中に何かのハズミで話がアメリカ人の上に移つたものと見え、二人の間には、切りにアメリカとか、アメリカ人と

いふ言葉が繰返されてるだが、英人の旅客は、突然爆發するがごとき老紳士の怒罵の聲を聞いた。

「何。アメリカ人？ あんな奴は強盗同然の野郎だ！ お前が大きくなつたら、一匹々々オ・グランデの向う側へ追つ拂つてやるがいい。」

老紳士の顔を窺み見ると、今まで愛と柔和とに輝いてゐた相は一切消え去つて、兩眼は憎悪のために燃え、口は憤怒のために痙攣つてゐた。この有様を眼のあたりで實見した英人の旅客は、彼の紀行の一節においていつてゐる。

「あの人の好きさうな老紳士が、恐らくは、一生に一度も夕の御祈を缺かしたこともあるまいと思はれる老紳士が、何といふ常規を逸した感情を爆發させたことだらう。——アメリカ人たちは、よく考へなければならぬ。アメリカの帝國主義は、結局メキシコ人のすべてを狂氣にするかも知れないからだ。」

前掲の論文において、甚だ簡單ではあるが、私はメキシコに對するアメリカの政策について

て説明して置いた。過去のこととは、今更どうにもならないが、將來においても、メキシコの富源が涸渇しないかぎり、石油や、銀や、林産の無盡蔵な蓄積が存在するかぎり、北方から伸びて来る資本主義の魔手は、矢張メキシコの平和を脅かす呪ひとなるだらう。この呪ひにして繼續する以上は、メキシコの軍神メヒトルの憤怒が靜まる時もなく、メキシコの父老の胸に湧き立つ憎悪が消滅する時もあるまい。アプトン・シンクレアに従へば、黄色新聞王ハーストは、メキシコにおいて宏大な土地を私有してゐるので、ハースト系の諸新聞は、最早十五個年間も米墨戦争の挑發に努めてゐるといふのだ。かうなつては、メキシコもいよいよよ浮ばれないといふものだ。

アメリカに對する感情からいふと、カリビアン灣の諸小國や、中央アメリカの諸小國の抱いてゐるものも、メキシコにおけると大差のないものだらう。ハイチの感情がどうであるかなどとは、更めて發する必要のない疑問だ。アメリカ占領軍の行つた暴虐無比の蠻行は、ハイチ人等の胸に長く忘れることの出来ない印象を止めてゐるに相違ない。サン・ドミンゴや、

キユーバにしても、彼等の健忘症にして救ふべからざるものでないかぎり、彼等といへども彼等に對してなせるアメリカの過去の行動を失念するものではあるまい。中央アメリカの諸小國にしても同じことだ。巴拿馬共和国の獨立以後、彼等は、年としてアメリカの壓迫を蒙るをらぬことはない。千九百七年、時の大統領ルーズヴェルトは、ワシントンに中米五個國會を開き、自ら指導者の地位に立つて強制仲裁を判定の協約を成立せしめたが、アメリカ側では、自ら誇稱して平和の斡旋者だと自惚れてゐるに拘らず、五個國側では、頗る有難迷惑の感を抱いたのだ。ルーズヴェルト以後になると、アメリカの壓迫は年とともに加はり、彼等の所謂ヤンキー・エムベリアリズムの鋒銳は、今や五個國をしてアメリカの保護領たる觀を呈せしめるに至つた。私は既に中央アメリカ聯邦の成立を論じたが、これなども全くアメリカの壓迫を避けんがために發案されたもので、その聲こそメキシコほど大ではないが、アメリカに對して抱いてゐる彼等の反感は、決して輕視すべきものではない。

「現在の政策を突詰めてゆくと、アメリカは、結局メキシコや、中央アメリカの諸小國を併合するところまで進むに相違ない。」

世界の識者は、期せずしてかかる見解に一致してゐる。世界の識者の見解が一致するばかりではない。メキシコ人や、中央アメリカ人等も、さうした時期の到來せんことを慮れて慄へ戦いてゐるのだ。中央アメリカの諸小國のごときは、寧ろアメリカに併合された方が幸福だらうといふ論者もあるが、一寸の蟲にも五分の魂があるの譬通り、小ければ小いだけに、中央アメリカ人には、中央アメリカ人特有の矜持がある。讀者諸君も知らるゝやうに、彼等はラテン民族の血を稟けたものだ。國家こそ劣弱ではあるが、人間としては、アメリカ人などよりも杳かに上等だと考へてゐるものだ。従つて、アメリカ人の侵略主義のために、自己共の國家が併呑されるかも知れないなどと考へることは、彼等の耐へ能はざる苦痛だ。彼等は断えず不安に脅えてゐる。不安に脅えて居りながら、自分の手で不安を取り除くだけの力はない。兎や角思ひ煩つた結果が、勢ひアメリカに對する熾烈な反感となるのだ。個人も、個人が集團も、經驗する感情においては變りがあらうわけではない。中央アメリカ人のことを

思ふと、私は座ろに同情の念を過めえないものだ。

弱者の悲鳴。——アメリカ人からいふと、すべてのものは、皆弱者の悲鳴にすぎないだらう。自己の強大な力を持ち、自己の超絶した立場を享受するものには、憐れなものに對する惻憐の心が起らない。戦前のドイツがさうだった。ロマノフ時代のロシアがさうだった。普墺戦争までのオーストリアがさうだった。チエツク族の上に加へられた高壓の手が、幾十年かの後において如何に酬ひたか。現在のごとく、幸福に輝くアメリカであればいい、何等かの意味における國家的災厄が見舞うて、アメリカが俄に苦難の底に沈むやうなことがあれば、弱者の悲鳴が果してどんな結果を將來するものか、アメリカ自身が、身をもつて實驗せねばならないやうな場合も來らないとはいはれまい。

#### 四 バン・アメリカニズム

一八八九年、ジョン・バレット及びレオ・エス・ローの首唱に基き、アメリカ政府の國務卿ブレーンは、南北アメリカに屬する二十一個國の代表をワシントンに集め、南北アメリカにおける相互の通商貿易を發達せしめるための大會議を開いた。その後引續いて七、八回開いたが、一九一〇年まではアメリカ共和國局と稱してゐたものを、一九一一年以後汎米同盟 (Pan American Union) と改稱することになつた。いはゆる汎米主義 (Pan Americanism) と稱する外交上の用語は、こゝに起源を負うてゐるのだ。

南北アメリカの諸國、特に南アメリカに屬する諸國が、アメリカに對して如何なる感情を有つてゐるかは、彼等のバン・アメリカニズムに對する態度を観察すれば、その間自ら明かな理解を得ることが出来る。會てバン・アメリカン・ユニオンの事務總長を勤めてゐたジョ

ン・パーレットのごときは、口を極めてバン・アメリカン・ユニオンの効能を吹聴し、「バン・アメリカン・ユニオンは、もつて南北アメリカの幸福を保障する唯一の道である。」とまで推賞してゐるが、バン・アメリカン・ユニオンの會員たる南北アメリカの諸國は、一向バン・アメリカン・ユニオンの存在をありがたがらない。ありがたがらないばかりでなく、バン・アメリカニズムの名に對しては、一種不可解ともいふべき嫌惡の感を抱き、アメリカの熱心な態度に反し、極端に冷淡な態度を持してゐる。

バン・アメリカン・ユニオン、——即ち、バン・アメリカニズムとは何であるか。アメリカ側の説明するところに據ると、南北アメリカ諸國の親睦と、平和と、通商とを増進するため國際的團結であるといふのであるが、その通りであれば頗る結構なものだといふの外はない。然るに、この結構なものに對して、アメリカ以外の諸國が一向乘氣にならないのは何故であるか。彼等のいふところを聞いて見ると、バン・アメリカニズムは、南北アメリカの平等的關係を律する政治上の保證ではなく、南北アメリカに對するアメリカの覇權を確立する

ための外に、機關に過ぎない。モンロー主義は、初め自衛上の手段であつた。漸く長ずるに及んで干渉の手段となり、最後においては變じて攻撃の具となつた。アメリカのいふところは、概ね察すべきのみ。バン・アメリカニズムも、ほどなく美々しい假面を脱いで、帝國主義の醜い本性を發揮するに相違ないと。

一九一〇年、アルゼンチナの首都ブエノス・アイレスにおいて開かれた全米會議の席上で起つたことであつた。會議に列席したサン・ドミンゴの代表者は決然として席を蹴つて立ち、正而から堂々とアメリカの僞善を痛罵していつた。

「全米會議の経過を顧るに、いつもアメリカの代表者が議長席を獨占し、満場の代表者中一人として眞面目に論議するものあるを見ない。なすところは、單にアメリカ代表によつて提出された原案を可決するに止まるのであるから、今後かかる無意味な會合は宜しく廢止した方がよからう。」

一九〇六年、ブラジルの首都リオ・デ・ジャネーロにおいて開かれた全米會議の席上で、ア

アメリカの國務卿ルートは演説して、アメリカが、最も劣弱な國家の主權を尊重する程度は、決して強大な帝國の主權を尊重する程度に劣らないといふ意味のことをいつた。ルート國務卿の辭令が如何に巧みであらうと、南北アメリカの諸國は欺かれるものでない。彼等は、メキシコの苦痛を知つてゐる。キューバや、サン・ドミンゴの悲しみを知つてゐる。コロンの憤怒を知つてゐる。アメリカの佞辯好辭の背後には、必ず帝國主義の七首が匿されてゐることを知つてゐる。アメリカの言葉が綺麗であればあるほど、彼等は醜いものを想像するのだ。——パン・アメリカニズムや、全米同盟を前にして、彼等が一向氣が乗らないのも無理はない。

南アメリカにおける反米感情は、先づ一般的だと考へてよからう。ラテン人種たることを無上の誇りとしてゐる彼等は、元來アメリカ人なるものが氣に食はない。その氣に食はないアメリカ人が、富強世界に冠たる大國家を建設して、南米諸國のごときは一個の嬰兒同然な扱ひをするのであるから、ますますもつて氣に食はない。ブラジルの珈琲を買つてくれる大

顧客はアメリカであるが、何かといふと、その點を利用して酷められるので、ブラジル人のごときも、一向アメリカ人をチャホヤしない。氣位の高い洒落者であるアルゼンチン人のごときは、下劣なヤンキーが來て、立派なアルゼンチンの趣味を墮落さして困ると吹き立ててゐる。殊に、アメリカ人得意の資本主義が侵入し、ブラジルにおいては鐵道に、アルゼンチンにおいては電氣に、ペルーにおいては銅に、チリーにおいては硝石に、ヴェネズラにおいては金に、當るに委せてグララーの威力を發揮し始めてから、南米諸國の困惑することは一通りでない。アメリカの資本主義には、必ずアメリカの覇制主義(Hegemony)が伴つてゐるからだ。コロムビアのごとく、アメリカに近接してゐる國では、最早メキシコにおけるがごとき兆候が顯れてゐる。金の洪水に苦しんでゐるアメリカが、今後南米に對して益々資本を投下するやうなことになるれば、南米全體が、總てメキシコ化する運命を有つやうになるかも知れない。南米人たるものは、須らく戒心すべきだ。

地理上の關係からいふと、最も歡迎されなければならぬ兩米大陸において、上述のご

とく、彼は殆んど例外なく悪まれてゐる。北方に唯一の善隣ともいふべきカナダがあつて、

一九四

不思議にもアメリカに多くの好意を寄せてゐるが、これには二つの理由があるらしい。一つの理由は、カナダが獨立國でなく、ヨーロッパの大強國イギリスの屬領たる地位にあるため、如何にアメリカといへども、彼の頭上に無遠慮な壓迫を加へる餘地の少なかつたといふことと、今一つの理由は、カナダとアメリカとが、相互にアングロ・サクソン民族を主體として成立した國家であるといふことだ。血は水よりも濃い。アメリカ人の眼には、カナダ人を見ること、殆んど血族のものに對するがごとき感じがあるやうだ。殊に、この二國は、多くの場合利害關係において一致し、互ひに赤眼を釣つてイガミ合はなければならぬやうなことに會はず機會がすくない。カナダの開拓のためには、アメリカの資本が必要であり、アメリカの産業のためには、カナダの購買力が必要だ。兩者は、相倚り、相靠れつゝ、相互に扶け合つてゐるのだ。それに較べると、ラテン・アメリカは違ふ。宗教が違ひ、言語が違ひ、人種が違ひ、文明が違ひ、立場が違ひ、好みが違ふ。ラテン・アメリカとアメリカとの關係が

如何に發展するかといふことは、私にとつて一つの大きい興味だ。

## 五 ヨーロッパと反アメリカ

ヨーロッパにおける反アメリカの感情には、一面アメリカの霸制主義に對するものと、一面アメリカの文明に對するものがある。前者の感情は、アメリカの政治的壓迫に對して、ヨーロッパの威嚴を保持せんとするところから起り、後者の感情は、アメリカニズムの文化形式を拒否して、ヨーロッパの固有文明を保持せんとするところから起るのだ。

歐洲大戰後におけるアメリカの傍若無人な行動が、如何にヨーロッパの諸國を困惑せしめたかは、すでに幾度となく説明したところだ。戦債問題に對するアメリカの誅求が苛練を極めた時、ブチ・ジョーナルは激怒して、アメリカは「國際間のシャイロツク」であるとして罵つた。戦後の幾ヶ年間におけるフランス人の反米感情ほど、意想外に熾烈を極めたもの



はあるまい。根本的には、ここにもラテン・アメリカ人におけると同様な民族的反感があるところへ、ことごとくにアメリカの政治的、経済的壓迫を感じたので、彼等の燃え易い感情が爆發するのにも無理はない。戦後におけるフランスの武備の強大なのに對して、アメリカ人は屢々露骨な批難を加へた。それがまた、フランス人には氣に食はない。彼はいふ。

「アメリカと、フランスとは違ふ。大西、太平洋に隔てられたアメリカは、外敵の侵入に對して絶対に安全であるが、フランスはどうであるか。ピレネーの向うにはスペインを、フランスの向うにはイタリーを、イングリツシユ・チャンネルの向うには英國を、そしてラインの向うには矢張ドイツを、假想敵國として有つてゐるのだ。すこしは、人の身にもなつて考へるがいい。」

ワシントン會議の時のごときも、アメリカの高壓的な態度に對して最も反感を持つたのは、矢張フランス代表であつた。アメリカの態度を評して、ブリアン全權がアメリカ流（American）といった言葉の中には、輕蔑と、嘲笑と、憤懣との感情が、極めて巧みに織り

込まれてゐるのだ。従つて、ジュネーヴに於いて開かれた會議に對しては、頭から責任ある代表を送らうとはせず、イタリーとともに傍聴者と稱するものを送つて、ホンの御茶を濁しただけであつた。英雄兒クレマンソーのごときは、頭からアメリカ及びアメリカ人に對して輕蔑の情を抱き、口を開けば、いつも「下等なヤンキーどもに、フランス人の高貴な感情が判つて堪るものか。」と嘯いてゐた。フランスの激落した當時、パリにおけるアメリカの大使館が、如何に民衆の憎惡的になつたかは、今に尙ほ私の記憶に残つてゐるところだ。根深い感情の疏隔は、到底埋め盡されたものでない。アメリカが口を利くと、フランスがいつも刺刺しい口吻をもつて答へるのは、最も良くフランスにおける反米感情の存在を物語るものだ。現に開かれてゐるロンドン會議のごときも、アメリカが依然として従來の手口を更めないやうであると、最初に席を蹴つて立つものは、矢張フランスであるに相違ない。現在におけるフランスは、過去におけるフランスよりも、一層アメリカに對して自由な態度を執り得る地位に立つてゐるからだ。

一九二四年、アメリカにおいて例の移民禁止法案が通過した時、日本に次いで最も大きな打撃を蒙つたものはイタリアであつた。法案通過の報に接するや、獨裁官ムツソリーニは、日本の立場に對して同情の意を表し、「イタリアは、最も切實に日本の感情を理解することが出来る。」といふ意味のことをいつた。日本と同じく、狭小な國土に過剰の人口を擁してゐるイタリアにとつても、アメリカにおける移民制限法案の通過は、非常な痛事であつただらう。元來、米、伊兩國の間には、例の戦債問題を除く外、これといふ利害の衝突もなく、別に親善だといふのでもなければ、別に不仲だといふのでもない。極めて淡い關係しか存在してゐなかつたが、アメリカに對するイタリアの移民が極度に制限せられてから以來、この國において、また反アメリカの感情が擡頭してゐるのだ。殊に、アメリカ人一流のデモクラシーの立場から、獨裁官ムツソリーニの鐵血政策を攻撃すること峻烈に失するため、ファシストの理想によつて統治せられてゐるイタリアが、勢ひ反アメリカ的になるのも止むをえない。ワシントン會議に對する遺口に對しても、イタリアは矢張好感を有つてはゐなかつた。

自國の富強を笠に著て、世界を前に號令を掛けるやうな態度を執ると、如何なる國といへども、いゝ心持のするわけではない。メモリアル・コンチネンタル・ホールにおけるイタリア代表シヤンツェルの演説を見ると、まるで氣の抜けたビールほどの辛味もない。義理か厄介で來てゐる會議のことだ。何となりと御勝手になさるがいゝといふのが、當時におけるイタリア代表の態度であつた。

ソヴィエツト・ロシアの反米感情のごときは、こゝに更めて説くまでもあるまい。今に至るも尙ほロシアを承認しない唯一の國はアメリカだ。アメリカ人の考へからいふと、ロシアとアメリカとは、絶対に兩立しえない國だといふにあるらしい。ロシアからいつても、アメリカは資本主義國の巨魁だ。共產主義の教理から見れば、彼等が最初の鐵鎚を見舞ふべきものは、當然アメリカでなければなるまい。對蹠人 (Anti-pode) とは彼等の間における關係を名付けたものだといつてもいい。假令アメリカが、無類の宏量を示して、ソヴィエツト・ロシアを承認して見たところで、それは英露の關係ほどにも圓滑に行くものではない。殊に、

ロシア人の心持の裡には、

二〇〇

傳統的ともいふべき反アングロ・サクソンの感情が渦巻いてゐる。アングロ・サクソンのすることとさへいへば、何事に對しても直ぐ茶々を入れたがるロシア人は、到底アメリカ人とも一致して行けるものではない。狡猾なレニンは、日米兩國を反目せしめて漁夫の利を得んとする目的から、日米兩國の間に利権の餌を投げ出して相争はしめたことがあつた。その當時にあつては、多少とも米露間の親交が問題にされたこともあるが、それも結局は一時の現象たるにとどまつて、終に何等の實をも結ぶに至らなかつた。ロシア人の陰鬱な理想主義と、アメリカ人の輕佻な實利主義とが、一時の小細工によつて容易に結び付くはすがない。アメリカ人がロシア嫌ひである程度に、ロシア人がアメリカ嫌ひであることは、頗る事理に合したることだといはなければならない。トロツキーはいつた。「アメリカの存在は、たゞ英國を弱めることにおいてのみ意味がある。アングロ・サクソンの種類は、是非とも彼等自身の裡から起つて來なければならぬ。」

「ブラス・チェック」に據ると、アメリカ人はマキシム・ゴルキーが大嫌ひで、上院議員のク

ムート・ネルソンといふ男は、「マキシム・ゴルキーといふ怖るべき獸物、——彼奴は背徳漢だ。」と放言して憚らなかつたといふことであるが、マキシム・ゴルキーといふ固有名詞の代りに、ソツイエツト・ロシアといふ固有名詞を置換へると、そつくりそのまゝで、アメリカ人のロシアに對する眞率な感情を表白することになるだらう。ロシアもロシア、アメリカもアメリカ、——何れも笑つて手を握り得る機會はあるまい。

## 六 英國人の感情

一九二一年といへば、今から凡そ十年前のことであるが、當時における英米兩國間の關係は、極めて危険な状態の下に置かれてゐた。同年の四月には、レオナルド・ヴィテチの「英米の衝突」と題する論文がリヴィング・エージ誌に載るし、同じく六月には、紐育のネーシオン誌が「英米不戦論」なる長論文を載せ初めるといふ始末で、英米間の國際關係は、一時

世界の話題となるほどであつた。

二〇二

當時の状況からいふと、英米兩國は既に幾年前に戦つてゐなければならんはずであるが、英國の自重と隠忍とのために、今日まで難なく経過して來たのだ。レオナルド・ヴィテチはいつてゐる。

「一八九八年から一九一四年に至る間の英國は、ドイツの國力伸長と帝國主義的野心による壓迫を受けたのであるが、常に温和な平和政策をもつて終始した。今日の英國がアメリカに對して執るところの政策も、これと全然軌を等しうするものだ。」

彼のいふごとく、英國人の忍耐力は驚くべきものはない、勿論自國の實力を打算した上でのことではあらうが、國家といへども、矢張算盤ばかり弾いてゐられるものではない。幾度となく危機は來たが、英國は斷じて動かなかつた。あるひは協調といひ、あるひは妥協といつたが、結果は常に英國の讓歩に終つた。戦つて倒れるよりも、寧ろ恥を忍んで、戦を避くるに加かすといふ英國人一流の功利主義が、英米兩國の間を、兎も角も今日まで平和に保つて來た唯一の理由だつた。英國人からいふと、歐洲大戰後におけるアメリカの横暴ほど、

彼の癪に障つたものはあるまい。成上りの分際で、大英帝國の傳統的權威などは屁とも思はず、自己の尨大な力を持んで、わが儘の仕放題を振舞うて來たアメリカの僭上沙汰を見ると、英國人の胸は怒りと不快とでワク／＼したに相違ない。今日のごときも、英米の間は、一見何のわだかまりもないやうであるが、その實を割つて見ると、英國は、瞬時といへどもアメリカに對する在來の感情を忘却するものではあるまい。

英米兩國間の協調が、結局爆發にまで達するに相違ないと主張する論者は、いつも英米兩國間の兩立しがたい利害關係について説くのだ。アメリカの膨脹が、英國に對して何等の影響をも與へないものならばいゝが、戦後に起つた状態から見ると、アメリカが肥滿することは、英國の瘠せ衰へることを意味してゐる。現在のまゝで推移すると、アメリカの繁榮は、結局英國の墓穴の上に築かれることになるかも知れない。すでに海上王たる地位を喪ひ、すでに世界經濟の中心たる榮譽を喪うた英國が、如何にして起死回生の策を建てようと試みるか。思うて茲に至ると、必ずや彼は、彼の前途に横はるアメリカと稱する障礙物に行きあた

るに相違ない。英國の進路を塞ぐものもアメリカ、

二〇四

英國の進路を塞ぐものもアメリカ、英國の進路を塞ぐものもアメリカ、大英帝國の瓦解に原因を與へるものもアメリカだとすれば、アメリカに對して抱いてゐる英國の感情が、今後といへどもさう易々と改善される見込はあるまい。英米の危険な關係について説明したネーション誌の記者は、アメリカが英國の上に與へる最も致命的な問題は、戦後のアメリカが、英國に對する最も怖るべき競商國として現れたことだといつてゐるが、アメリカ品の侵蝕によつて、英國品の驅逐された市場を擧げると、殆んど世界の各部分に亘るだらう。英國が、到底アメリカと握手し能はざる所以だ。

英國に對して、最初から苦手として現れたものはアメリカであつた。多くの植民地もあるが、最も早く反抗の火の手を擧げたものもアメリカであるし、一八一三年にエリー湖上で手酷く英國艦隊を叩きつけたのもアメリカである。アメリカの國務卿オルニーは、曾て英國の外相サリスベリーに對し、「事實上、南北アメリカを支配するものはアメリカだ。」といつて啖呵を切つたことがあるが、何れにしても、アメリカに對する英國の態度は、戦前において

も既に讓歩的であつたといふ外はない。それだけに一層、アメリカに對する英國の反感は、傳統的な根強さを有つてゐるだらう。ヘンリー・ゼームスの書いたものの中に、ある英國の貴族が、表面にはアメリカの成金をチャホヤしてゐる癖に、腹の底では輕蔑し切つてゐることを題材にしたものがあつたやうに記憶してゐるが、英國人の反米感情は、眼に立たない割に、極めて熾烈なものがあるらしい。アメリカ語に對する英國人の嫌惡の情を見よ。言葉の傳統を重んじる點もないではあるまいが、その主なる原因は、それがアメリカ人特有の用語だといふことにあるのだ。同じくアングロ・サクソンであるとはいへ、今日のアメリカ人は、最早眞正な意味におけるアングロ・サクソンではない。利害が共通する範圍内では、アングロ・サクソンの名によつて聯合するが、利害が相反する場合には、躊躇なく袂を別つて異つた道を歩むのだ。詩人キプリングは黄白兩人種の關係を歌つて、「東は東、西は西。」といつたが、私は英米兩國の關係を叙して、「アメリカはアメリカ、英國は英國。」といひたい。兩者の間は極めて近いやうであるが、その實は極めて遠い。終に相合ふことなき點に至つて

は、黄白兩人種の関係も、

英米兩國の関係も、

さして違つたところは

順序として、私はドイツにおける反米感情について語るべきであるが、

は極く簡単に要領だけを述べて置きたい。現在のドイツ人は、アメリカの厄介になつて生き

てゐる。従つて彼は露骨に反アメリカの感情を表白しえないが、如何に健忘的な彼等といへ

ども、歐洲大戦のクリチカル・モメントにおいて、ドイツから總ての戦勝の希望を奪ひ去つ

たものが、外ならぬアメリカであつたことを忘れてゐるものではあるまい。ウキルソンは、ド

イツの欣びさうなことを多々並べ立てたが、それらの一つといへども實現したものはない。

ウキルソンの誠意は疑はないまでも、ウキルソンの努力は疑ふべきものだ。かゝる感情が、

ドイツ人の吐に潜んでゐるとすれば、ドイツ人といへども、アメリカに對して好意を寄せる

理由はない。殊に、ドイツ人の最も嫌惡するものは、アメリカニズムの文化様式だ。ゲエテ

を誇り、ベートヴェンを誇り、カントを誇る彼等から見ると、アメリカにおいて發達しつゝ

ある文明ほど、彼等の輕蔑に値するものはあるまい。漸次、アメリカの資本がドイツの産業

界に食ひ入つて來るごとく、アメリカの新文明がドイツの文化の脅威するに至ることは、ド  
イツ及びドイツ人にとつては殆んど忍ぶべからざる苦痛となるだらう。ドイツの著述家とい  
ふ著述家が、筆を揃へてアメリカニズムの論議を繰返すことも、強ち時代の流行にのみ支配  
されてゐるわけではあるまい。

## 七 日本に感謝せよ

極めて大雑把ではあるが、世界に漲る反アメリカの思潮について、私は一通りの概観を述  
べた。残るところは日本を主とするアジアの方面であるが、それは更めて茲に説くまでもあ  
るまい。アメリカに對して、日本が如何なる感情を有つてゐるか、日本に對して、アメリカ  
が如何なる感情を有つてゐるかは、今日既に世界周知の事實となつてゐる。

たゞアジアについて特記すべき事實は、現代の青年支那において、アメリカが唯一の歸依

者を有つてゐるといふことだ。青年支那は、アメリカをもつて救世主のごとく心得、アメリカは、青年支那をもつて愛すべき下男ぐらゐに考へてゐる。アメリカの眞意が那邊にあるかは疑問であるが、青年支那のいふことでさへあれば、直ちに取りあけて問題にすることは事實だ。ヴェルサイユ會議以來、アメリカの支援を有する青年支那が、アメリカの支援を笠に若て、如何に烈しく日本に楯付いて来たか。日本にして耐へ忍ぶところがなかつたならば、日米兩國間の平和は、支那問題のために、最早とつくに破れてゐたかも知れない。日本に對して敵意を有するために、自然アメリカの好友となつたものには、今一つオーストラリアがある。カナダの對米親善の動機にも、幾分かは日本に對する利害の共通したところから来た點があらう。世界の憎まれ者であるアメリカは、日本あるのゆゑをもつて、すくなくとも三個の好友をえた。日本の存在に對して、アメリカは宜しく感謝するところがあつて然るべきではないか。

1946 21  
1936 11  
1931 6  
1930 5

昭和五年四月十三日印刷		昭和五年四月十七日發行	
世界を脅威する アメリカニズム		定價一圓二十錢	
發行所	東京市神田區長神保町一〇番地	發行所	東京市神田區長神保町一〇番地
天	池崎忠孝	天	池崎忠孝
人	森岡豊吉	人	森岡豊吉
社	君島 君	社	君島 君
	東京市小石川區久堅町一〇八番地		東京市小石川區久堅町一〇八番地

天 人 社  
電話東京 五五二〇番  
電話神田 二六八七番